アレクサンダー・カップの生家

谷　和明

ルートヴィヒシュタット市の記録によれば、バイエルン大公国北端のこの地域の行政庁の司法官僚であったアレクサンダー・カップの父親 Johann Christian Wolfgang Kapp（1763 年 7 月 3 日―1814 年 1 月 6 日）は 1788 年に近在の村の牧師の娘と結婚し、1791 年 7 月 5 日ルートヴィヒシュタット市マルクトプラッツ 75（現在表記ではマルクトプラッツ 8）の 3 階建ての住居を持ち家とした。

アレクサンダー・カップはこの家で 1800 年に誕生し、ギムナジウムに入学するまでの幼少期を過ごしたと考えられる。

ルートヴィヒシュタットはその名が示すように、1490 年に領主から都市権を認められた「都市」であるが、周辺の町村を合併した現在でも、面積 59 平方キロメートル、人口 3900 名の山間の田舎町である。だから、マルクトプラッツ（市の開かれる広場）といっても空地程度だが、両親が挙式した教会や市庁舎のある中心地であった。その市庁舎に対面する位置にカップの生家はあった。

① 右の写真は、市の文書係から提供していただいたものである。20 世紀初頭のもので、高台からマルクトプラッツの方向を撮影している。中央にある、屋根に塔のある建物が旧市庁舎で、その背後に隠れているスペースがマルクトプラッツである。市庁舎の塔に重なって見える明るい壁面の建物は薬局で、その右隣のやや暗い外装の 3 階建ての建物（矢印で示したところ）がカップの生家である。さらにその隣に少しだけ見える建物は rote Adler（赤鷲館）という旅館である。

薬局は現在も同じ建物が薬局として使用されている。赤鷲館の建物も保存されており、現在では 1 階部分にレストランが入居している。ところが、カップの生家だった建物は 1970 年初頭に解体撤去され、そこに新しい建物が建てられた。というわけで、カップの生家は今では存在しない。

② 右の写真は 2012 年 8 月 17 日に、上記の写真にかなり近い角度で同じ場所を撮影したものである。

手前の木で本体はほとんど隠されているが、市庁舎の塔が見える。その向こうに見えるベージュの外壁の建物は教会である。そしてその右手、市庁舎の向かい側に見える赤い木組みの建物が薬局であり、その右のやはり木組みの外装の建物がカップの生家の跡地に建てられたものである。

③さきの写真と同じものだが、トリミングなしでより広い光景を示した。ルートヴィヒシュタット中心部の様子がわかるだろう。

④　マルクトプラッツで、市庁舎を背にして撮影したもの(2012 年 8 月 17 日)。左から薬局、カップの生家跡に新設された建物、赤鷲館だった建物である。

　新築されたとはいえ、大きさや様式は両隣の建物と調和して作られており、言われなければ同じくらい古い建物だと思ってしまうだろう。が、①の写真のカップの生家と比較すると、屋根の向きが変わっていること、３階の窓の数か 4 から 2 になっていることがわかる。

　この建物は、現在 AOK というドイツ全国で展開する医療保険会社の事務所として利用されていた。その職員に、建物の由来を尋ねたが、もちろんカップ家のことなど全く知らなかった。

　⑤　全くの偶然であるが、カップの生家跡の写真を撮影したことを宿の老主人に話したところ、その建物を解体した時の写真があったはずだといって、翌朝すっかり変色した２枚の写真を探し出して見せてくれた。それを、デジタルカメラでコピーしたものである。屋根は解体されているが、本体部分は残っている。、カップの生家最後の姿である。